



## 日新バイオマス発電 株式会社

### 事業内容

木質チップを燃料としたバイオマス発電事業

創業 平成25 (2013) 年6月7日

代表者 代表取締役 来海 邦夫

社員数 12名 (男12名 女0名)

本社 鳥取県境港市西工業団地46-1

電話 0859-21-4591

### 採用エリア (勤務地)

境港市

### 採用担当者からあなたへ

「バイオマス発電」という言葉に興味を持った好奇心旺盛なあなたに向いている会社です! 当社は境港市の約2/3世帯分の電力を発電する設備を運営しています。この仕事にやりがいや興味を持てる方、素直な方、意欲のある方をお待ちしています!



人事部  
森口 海渡さん

資料請求・お問い合わせ先

採用直通 TEL

0859-47-0303

採用直通 E-mail

k.moriguchi@nisshin.gr.jp

公式サイトは  
こちら



動画サイトは  
こちら



### 山や国土を守るカーボンニュートラル事業

高校の機械科でボイラーを学び、熱を生み出していく仕組みには関心を持っていた。就職活動時は発電所が稼働する1年前で、地元で始まる新たな事業に興味を抱き、門戸をたたいた。現在は主に制御室で設備全体の集中制御を担う。「制御室では、蒸気圧力を一定に保つために、燃料チップの供給量を調整して、燃焼をコントロールしています」

昨年からは、班長としてチームをまとめる役割も加わった。「チップ投入が早い人、単純作業が好きな人など皆カラーが違いますので、長所を伸ばせるサポートを心掛けています」。カーボンニュートラルな事業に携わっていることを誇りにしている。「廃材や未利用材を活用し、山もきれいにします。すごいなって思います」



日新バイオマス発電株式会社  
長崎 貴大さん(27)  
2013年入社



### 発電所の制御からチップ製造、運搬まで

発電所の燃料には、合板製造の過程で出る端材やチップのほか、製品化できない原木を社員自ら機械でチップ加工したものなども使われる。「発電所の制御に注力したり、フォークリフトでの燃料投入を行ったり、燃料を自ら作ったりとさまざまな業務がある職場。じっとしているのが苦手な性分なので、自分には合っているようです」。専門学校卒業後、サービス業などを経て転職。「製造業には興味があったけど、いわゆる流れ作業は苦手で。迅速に異常を見つけ、対処する力が求められるため、入社前よりも積極的に自分から動くようになったような気がします」。グループ主催の山林研修で原木の伐採や植林も経験。「燃料」をより大切に感じるようになった。



日新バイオマス発電株式会社  
小林 巧さん(28)  
2017年入社



### 溶接や玉掛けの資格も取得し、スキルアップを

6階建てのボイラー棟内を毎日交代でパトロールし、異常を発見した際には即座に対応する。「チップを送り出すモーターのファンの羽根が一枚割れていたため冷却がうまくできず、モーターが熱くなっているのに気づいたことも。あわやボイラー停止を免れました。わずかな見逃しが大きなエラーにつながるので気が抜けません」。約2時間弱のパトロールに加え、原木からチップを作ったり、灰を取り除いたり、発電所内のさまざまな業務を担当。「広い敷地内を歩き回るので体力がつかまりましたね」と笑う。入社後に取得した2級ボイラー技工士に加え、今後はアーク溶接や玉掛けの資格取得も目指している。「頑張ればスキルアップでき、業務にも生かせるのでやりがいを感じます」



日新バイオマス発電株式会社  
多城 嘉騎さん(20)  
2020年入社



1 境港市の約3分の2世帯の使用電力分にあたる年間4500万kwhを発電する最大出力5700kwの発電設備 2 木質チップを燃焼させて蒸気を生ずる。常用蒸気温度は453度にも上る 3 フィーダーでボイラーに木質チップを供給。年間8万トンが燃料として使われる 4 「エネルギーの地産地消で地域に貢献したい」と話す来海邦夫社長

## 日新バイオマス発電 株式会社

# バイオマス発電事業を通して、日本の山を活性化する

11  
LEADING COMPANY

端材や未利用材を活用し  
ゼロカーボン発電を実現

近年よく耳にする「バイオマス」という言葉。生物資源(Bio)の量(mass)を表し、「再生可能な、生物由来の有機性資源」を意味する。木材からなるのが「木質バイオマス」で、これを燃料としてタービンを回し、発電する仕組みが木質バイオマス発電だ。(日新バイオマス発電株式会社)の立ち上げから関わった来海邦夫社長(75)は、「木質は、数ある再生可能エネルギー資源の中でも安定的に供給・発電が可能で、カーボンニュートラルな特性も有している。事業を通して、日本の山を活性化させていきたい」と話す。

2013年、「株式会社日新」の100%子会社として設立。同社で合板製造の際に出る大量の端材などの引き取り先がなくなったのを機に、鳥取県などと共に推進協議会を立ち上げ、2年後から発電をスタートさせた。年間に用いる燃料は8万トンで、その約50%が(日新)の工場から出る端材を活用。残り50%は地域から出る間伐材や未利用材を加工した木質チップが占める。年間4500万kwhを発電、境港市の約3分の2世帯の使用電力分にあたる。一日に使う木質チップは230ト

ン。ボイラーに供給された木質チップは循環式水管ボイラーで燃焼されて、蒸気を生ずる。その蒸気を利用して発電機を起動し、電力を生ずるといった仕組みだ。常に一定の圧力に保たれるよう発電量を監視し、木質チップの供給量を調整して燃焼をコントロールする。

バイオマス発電の大きな特徴の一つが、燃焼エネルギーを用いるにも関わらず「ゼロカーボン」な点。木材を燃焼することで放出されるCO<sub>2</sub>は、木の成長過程で光合成により吸収された大気中のCO<sub>2</sub>なので、木のライフサイクルの中では大気中のCO<sub>2</sub>を増加させないというわけだ。木の伐採後、新たな木を植えることで森林の持続を図れるため、グループ会社では植林活動にも注力している。来海社長は、「太陽光や風力に比べ、気象条件に左右されないのも利点です」と話す。

固定価格買取制度(FIT)などによってバイオマス発電の導入が進み、全国では22年度末現在で183施設、制度開始時の8倍強に増えた。燃料不足が課題になる中、国内シェア30%を誇る合板会社をグループに持っているのが当社の強みだ。「燃料確保は悩みの種ですが、グループや地域と連携し、地域に還元できる発電事業を続けていきたい」